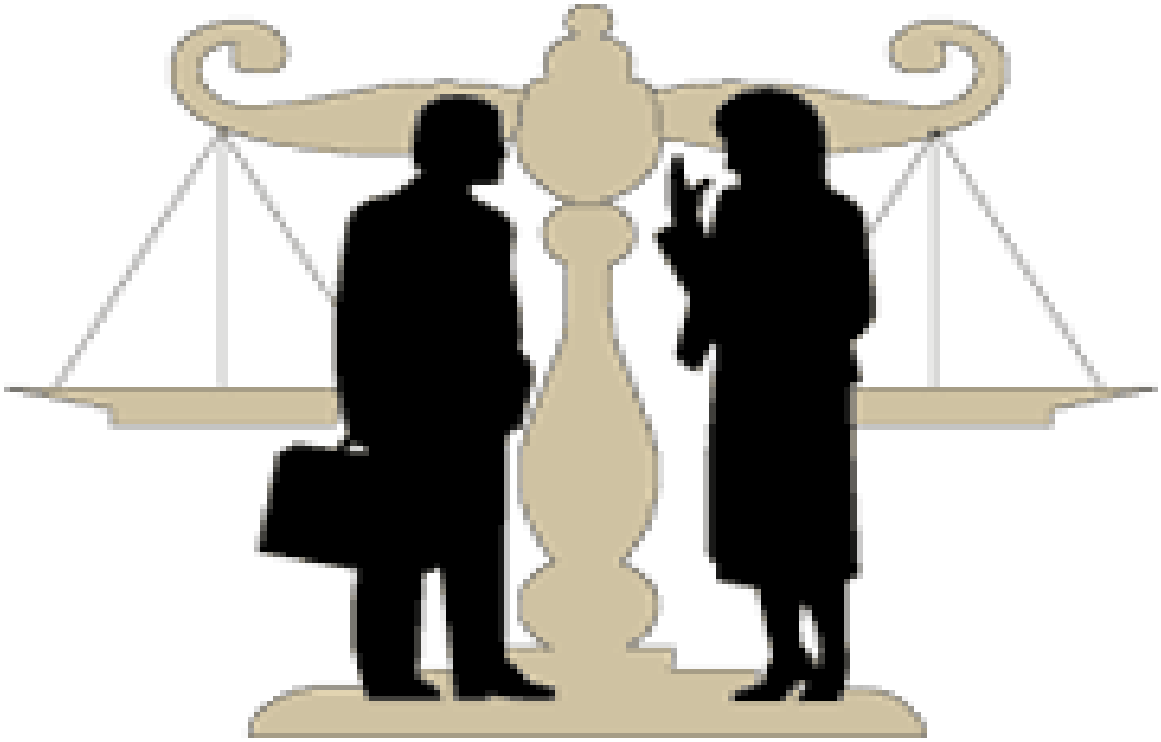
森村・川村ゼミ個人研究発表 06/06/28
04G0202　小川慶太

# 「新しい社会―男女共生社会へのアプローチ―」



## １　はじめに

「私はどう生きればいいのだろう。」私が「フェミニズム」や「ジェンダー」という思想・理論に出会ったときの戸惑いは、この言葉に集約できる。このときはじめて、私は「自分が男性であること」を社会的な文脈の上で意識したのだと思う。そして男女共生社会という一にもニにもうそ臭いフレーズに関心をよせたのも、このときがはじめてだったと思う。では、男女共生社会とは何かという問いには、私の中でいまだ明確な答えを出せないでいる。しかし。どのような社会を望むかというのならば、私の中にも漠然としたイメージがある。そのイメージを、西暦２００６年に生きる「この私」が、今、ここに描き出したいと思う。そのためには、ジェンダーの理論やフェミニズムの思想をうけて展開するのが、私はいいと思う。私たちが生活する社会は男と女で構成されているのは確かであり、もし本当に現在に至るまでの歴史が、男性主権的な世界であって、「普遍」という言葉が一部の男性にのみ適用できる言葉であって、「万人」という言葉が常に誰かを捨象して使われてきたならば、過去は徹底的に批判する勇気と視点を持つことが新たな世界を描きうる条件だと信じるからだ。（ここでの「男」と「女」は、生物学的な意（ＳＥＸ）で使っている。ゲイやレズビアンの存在を捨象しているわけではない。）この時代に生きる一人の男として、個人的な経験や考えも交えながら、話したいと思う。

まず、ジェンダー理論やフェミニズムの歴史を概観し、そのあとで、新しい社会へのアプローチ方法やイメージを構想していきたい。

## ２　ジェンダー〈性差は作られたもの〉

□　女性学

・　社会や規定の学問の中の男性中心主義を問題とする学際的な研究。男女の性差を生物学的に決定されたものとは看做さずに、文化的・社会的に構築された「ジェンダー」として注目する。

□　男性学（女性学を経由した男性の自己省察の学）

・　男のセクシュアリティの自由を追求する男性中心主義社会批判の運動から生まれる。

→男性の両面性の指摘。男性は女性に対する被害者であると同時に、「男らしさ」の被害者でもある。

□　身体―語られるべき主体へ―

男性と女性の「身体的差異」をどう解釈し、位置づけるのかという問いが為されてから、今までもっぱら医学や生物学などの自然科学の分野に限定されてきたこの「身体」というものが、はじめて語られるべき主体になった。どれだけそのことに自覚的であるかは別として、私たちは日々をそれぞれの身体として生きている。

□　ポジショナリティ

ジェンダーはいわゆる今までの「普遍の真理」と批判する。そして「話者」が、文化や時代に限定された自分の「位置(ポジショナリティ)」からしか語ることを許さない。

## ３　フェミニズムの主張

女性が受ける差別や抑圧から女性を解放し、男女平等を目指す。

・　第一期・・・１９世紀半ばから２０世紀にかけて、女性参政権の獲得を中心課題とする女権拡張運動。制度上の平等をもとめた。

・　第二期・・・１９６０年代から７０年代を中心に展開。ジェンダーの視点から、制度上の平等だけでなく、実質的な平等をもとめた運動。女性の経済的自立・性別役割分担の解消・性行為や子を産むことの自己決定権の主張。

→近代の学問そのものが欧米・白人・男性中心に貫かれていることを指摘。

○　会社が男社会なのは、駄目なこと？

→確かに社会の動きは、女性の進学・就職・結婚適齢期や身体的なサイクルとずれている

○　女性は男性になりたかったのかだろうか？

○　フェミニズムやジェンダー理論を学ぶことは、この社会を生きにくくすることにつながるのか

## ４　新しい社会へのアプローチ

□　子ども時代から、男の子と女の子が一緒に遊べるような環境

→男の子的な価値観と、女の子的な価値観の差異を超えるようなものが必要

□　必要な出会いに恵まれる環境

→他者の存在の認識、必要な時期に必要な人に出会えるよう、社会をシャッフルする→性別や年代の壁を超える

□　手段としてのボランティア

→「共同作業」がキーワード

○　新しい恋愛の可能性は？

○　男女の友情は成立するか

## ５　考察

問題を意識するためには、「痛み」が必要なのかもしれない。たとえば白人男性に自分の身体的特徴を問うたとしても「白人である」という返答がくることはあまり多くはないのではないだろうか。また、健常者が自分の身体をあらわす言葉として「障害がないこと」をあげるケースも少ないだろう。自らを社会的弱者として、またはマイノリティとして認識し、それに居心地の悪さを感じた人々、自己にまつわる事柄を「痛み」と認識する人達によって、社会の問題は明確化されてきた面があるのは事実だと思う。

「他者の痛み」は内面化することはできない。しかし、その「痛み」を目のあたりにすることは可能である。そのためには、用意されたレールの上を歩いたのでは出会うはずのなかった他者に出会えるフィールドが様々なバリエーションをもって存在する社会が必要だと考える。そこで、新しいコミュニケーションの場をどうにかつくりだすことはできないか、と私は考えた。私はボランティアという行為に、その鍵がかくされているのではないかと思っているのだが・・・

現在に至るまでのあらゆる理論も、思想も、その存在自体には価値があるが、それが有効に生かされるためには一人一人が考える主体になることが条件である。私たちは、選択をできるという意味において「自由」であるかもしれないが、「自由」という選択肢をもっているわけではない。若い感性は古臭い教師に認めれられるためにあるのだはない。新しい社会を切り開くためにあるはず。そしてその行為は自己犠牲的なものであってはならないと思います。

□　**参考文献**

・荻目美穂「ジェンダー化される身体」
・　オバタカズユキ「だから女は大変だ」
・　熊田一雄「男らしさという病？」
・　「現代思想臨時増刊　現代思想のキーワード」
・　山口意友「女子大生のための倫理学読本」
・　朝日出版社「ＭＩＮＩ　ＤＩＣＴＩＯＮＡＲＹ」